

中学生の同調について  
—規則場面・人間関係場面・集団行動場面における検討—

発表者：眞嶋結香

指導教員：中間玲子

【研究の概要】

本研究では、中学生の学校生活での同調について調査した。研究の目的は、中学生がどのような場面で同調しやすいのか、自分のもともとの気持ちととった行動との組み合わせによる同調タイプとストレスや感情の感じ方に差があるのかの2点について検討することである。

【論文構成】

第1章 問題と目的	第3章 結果
はじめに	第1節 全体の傾向
第1節 現在のいじめの状態はどうなっているのか	第2節 学年および性別による差の検討
第2節 中学生の特性	第3節 場面と程度の条件による差の検討
第3節 同調	第4節 同調タイプによるストレスや気分の差の検討
第4節 研究の目的	第4章 考察
第2章 方法	第1節 全体の傾向
第1節 被験者・調査時期	第2節 学年および性別による差の検討
第2節 手続き	第3節 場面と程度の条件による差の検討
第3節 質問紙の構成	第4節 同調タイプによるストレスや気分の差の検討
	第5節 全体の結果
	第6節 今後の課題

【問題と目的】

現在のいじめは、被害者の立場が入れ替わり見えにくくなっている。その原因として、現代のいじめに関係性攻撃（自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する攻撃で、集団からの排除や悪意のある噂の流布などがある）が関わっていることが指摘されている。また、いじめの構造には、被害者・加害者・観衆・傍観者が存在している。傍観者から暗黙的支持の作用が働くために、いじめが促進され見えにくくなる。傍観者が多くいることも、いじめが見えにくくなっている原因として考えられる（森田・清水，1986）。これらのことは中学生で多く見られ、中学生でいじめが陰湿化・深刻化していることが先行研究より明らかにされている。現在多く見られる「見えにくいいじめ」について調べていくなれば、中学生に着目すべきであると考えられる。

中学生の特性についての先行研究から、他者の視線を重要視する、同質性や類似性を重要視する、仲間への同調を高める特性があることが分かった。青年期の特徴の公的自意識が高いほど同調が起りやすく、いじめ場面で中学生の同調傾向が示された。

これらのことから、いじめと同調には関係があり、同調する人が増えることでいじめ場面の傍観者が増えることにつながっているかもしれない。遠藤（2013）では、同調しやすい条件として、人数が多い、全員が同じことをする、教育水準・文化・年齢など似た点がある集団、集団の中で地位が低い人をあげている。ここから、学級集団では同調が起りやすいことが考えられる。学級集団での同調の傾向を調べておくことで、いじめにつながる前に対処できることが見つかるのではないかと考えた。

本研究では次のことを検討することを目的とする。1つ目は、中学生がどのような場面で同調しやすいのか、2つ目は、自分のもともとの気持ちととった行動との組み合わせによる同調タイ

プとストレスのレベル・内容がどのように関係しているのかについてだ。

#### 【方法】

質問紙調査は、A市立の中学校1～3年生の全校生徒を対象に実施した。中学校生活で起こると考えられる場面として、規則場面・人間関係場面・集団行動場面を設定し、各場面で同調することによっての程度の軽重を想定し、計6つの場面を用意した。今回の研究では、クラスの雰囲気を見て同調してしまう場面を調べることに絞ったため、各場面の説明部分で、「クラスではほとんどの人たちが…している」という記述を加えた。次にそれぞれの場面ごとに、本人の気持ち・その場面で自分がとると思われる行動・とった行動によって感じるストレスについての質問を作成した。気持ち・行動は1～4の4件法、ストレスは0～5の6件法、行動したときのストレス・感情については当てはまるもの全てにチェックするように求めた。また、なぜそのような行動をするのか、行動の理由について自由記述で回答を求めた。

#### 【結果とまとめ】

1つ目の目的に関する結果からは、同調しやすい場面には、軽重が影響しており、軽程度の方が重程度より同調しやすいことが明らかになった。また、軽程度と重程度では、同調しやすい場面の順番が異なっていた。軽程度は、集団行動場面>人間関係場面>規則場面、重程度では、集団行動場面>規則場面>人間関係場面であった。

2つ目の目的については、各場面の本人の気持ち・行動・とった行動によるストレス・感情の程度の関係を検討するために、回答内容でグループ分けを行い、同調タイプを設定した。本人の気持ちと行動の回答の組み合わせから、4つの同調タイプに各場面の回答を分類し、タイプによってストレスの程度や感じる感情の違いがあるかを検討した。同調タイプは、NN（同調しない・一致）、NY（同調する・不一致）、YN（同調しない・不一致）、YY（同調する・一致）である。

ストレスの大きさに関して人間関係場面と集団行動場面では有意な結果が見られた。人間関係場面については、軽程度において、気持ちと行動が不一致の場合、また一致していても同調した場合はストレスが大きいことが明らかになった。重程度では気持ちと行動が不一致で同調するタイプがストレスが大きいことが明らかになった。つまり、人間関係場面では同調することにストレスを感じる傾向があり、同調してさらに不一致の場合はよりストレスを感じる傾向があることが明らかになった。集団行動場面については、軽程度・重程度ともに、皆と同じ行動をとりたくないという気持ちがストレスに大きく影響することが明らかになった。

研究の結果、場面と軽重によって同調のしやすさが変わることや、同調タイプによってストレス・感情が変わることが明らかになった。人間関係場面は特にいじめに直結する可能性が高い場面であり、軽重で大きな差が見られたため、まずは軽程度での同調が起こらないように、早期発見・対応をする必要がある。

#### 【主要参考文献】

- ・伊藤美奈子（2017）. いじめる・いじられる経験の背景要因に関する基礎的研究—自尊感情に着目して—, 教育心理学研究, 65, 26-36
- ・森田洋司・清水賢二（1986）. いじめ教室の病い 金子書房
- ・上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994）. 青年期の交友関係における同調と心理的距離, 教育心理学, 42, 21-28